



CENTER NEWS

www.ircme.u-tokyo.ac.jp



Contents

● 東京大学医学教育国際研究協力センター開設 10周年記念式典 2 教授 北村 聖	● 日本医学教育学会報告～医学教育懸田賞受賞～ 7 講師 錦織 宏
● センター設立10周年記念・シンポジウム 2 講師 大西 弘高	● 模擬患者つつじの会 8 特任研究員 三木 祐子
● センター設立10周年記念・懇親会 3 講師 錦織 宏	● 医療面接実習(臨床診断学実習) 8 教務補佐員 澤山 芳枝 講師 錦織 宏
● JICAラオス国セタティラート大学病院 医学教育研究機能強化プロジェクト 4 講師 大西 弘高	● 東京大学医学教育セミナー 9 講師 錦織 宏 事務補佐員 三浦 和歌子
● JICAアフガニスタン医学教育 プロジェクトフォローアップ協力 5 講師 大西 弘高	● 共用試験OSCE 9 教務補佐員 澤山 芳枝 講師 錦織 宏
● インドネシア国立イスラム大学医学教育研修 5 特任研究員 片山 亜弥	● 医学教育改革WGによる公開討論会 10 講師 錦織 宏
● 日本医学教育学会牛場賞を受賞して 6 東京大学名誉教授 東京大学医学教育国際協力研究センター名誉センター長 東京医療センター・臨床研究(感覚器)センター 加我 君孝	● オタワ会議参加報告 10 講師 大西 弘高
● 日本医学教育学会参加報告 7 講師 大西 弘高	● APMEC参加報告 11 講師 錦織 宏
	● 西太平洋地区医学教育会議 11 講師 大西 弘高

東京大学医学教育国際協力研究センター開設10周年記念

● 式典

教授 北村 聖

東京大学医学教育国際協力研究センター開設10周年記念式典・シンポジウムは、2部に分かれており、最初は華やかな中でも厳粛な式典が行われた。司会は北村聖が担当した。

最初に3名の来賓の先生方から祝辞があった。まず、日本医学会会長高久史麿先生からは、2003年に医学教育振興財団が主催する「視察と討論の会」を東京大学で開催し、東京大学の医学教育が非常に大きな変革を遂げていたことを見た思い出や、センターの外部評価者としてアフガニスタン、ラオスといった国々の医学教育についても貢献をしていることの紹介などを踏まえたうえで、東京大学が医学教育の分野でもリーダーシップをとるようとの励ましをいただいた。

文部科学省大臣官房国際課長芝田政之さまからは、大学が行う国際協力の重要性を指摘したうえで、わがセンターが大学の国際貢献、国際協力を通じた医学教育をより組織的な活動に引き上げていく上で先導的な役割を果たしたと評価された。さらに我が国の国際協力の一つの拠点となることが期待されると将来の展望にも触れられた。

来賓祝辞の最後に、医学部、医学系研究科を代表して大学院医学系研究科副研究科長飯野正光先生が、センターの活動を3点に絞って評価された。すなわち、医学部の教育カリキュラム改革、PBLや模擬患者などの新しい教育技法の導入、さらに医学部教員の教育マインドの向上について教育センターの成果と評価された。

● シンポジウム

10周年記念シンポジウムでは、センターに縁の深い国内外の5人の先生方に講演をいただいた。1人目は、米国ニューメキシコ大学医学部副医学部長・内科学教授であるエレン・コズグロブ先生である。2005年11月1日～2006年4月30日に客員教授としてセンターに在任された。在任中の講演「プロフェッショナリズムと医学教育」は、このテーマに関心が高まりつつあった当時の日本に大きな影響を与えた。今回は、「プロフェッショナリズム2010：環境を変革するための実践的ステップ」という講演であった。プロフェッショナリズムの教育に大きな影響力を持つ、場の風土、文化を教育者として変革するための具体的な示唆に富む内容であった。

2人目は、マレーシア国際医学大学医学部家庭医療学准教授のヌージャハン・モハメド・イブラヒム先生である。2009年2月1日～5月30日に客員准教授としてセンターに在任された。今回は、「医学生への態度評価」というテーマでの講演をされた。態度評価の多くがプロフェッショナリズム評価と重なっており、どういう要素があるのか、いつどのように誰が評価するのかといった点について、文献的な考察を含めた内容であった。

3人目は、米国オレゴン健康科学大学内科学、医学教育学教授のゴードン・ノエル先生である。2001年10月1日～2002年3月31日に客員教授としてセンターに在任された。在任中6回の講演は、「変貌する日本の医学教育—米国医学教育者の提言」として翻訳出版されているが、海外の流れに関係なく独自の発展をしてきた日本の医学教育をガラパゴス諸島に

その後、元客員教授のカナダ・マギル大学医学部教授リンダ・スネル先生からのビデオメッセージが放映された。リンダ先生からは日本に滞在した思い出に加え、今後の相互協力を期待する旨の話があった。

引き続き、センター教員からの活動報告があり、これまで10年の活動内容が紹介された。部門報告1として医学教育国際協力部門・外国人客員教授部門の紹介が錦織宏講師からあった。今までの客員教授の活動内容の紹介と、東大の医学教育をはじめ日本の医学教育に対して果たした貢献について報告した。

部門報告2では医学教育国際協力事業企画調整・情報部門の活動内容が大西弘高講師から報告された。アフガニスタン、インドネシア、ラオスの各国での医学教育分野での国際協力が紹介され、改めて10年という期間の長さや活動の幅の広さが強く印象付けられた。

式典は約1時間で終了し、参加者全員で記念撮影をして、その後、記念シンポジウムに移行した。



▲ 司会進行の筆者

講師 大西 弘高

見立てたフレーズが有名である。今回は、「日本の医学教育に対する米国教育者の印象：振り返りと展望」という講演であった。この10年間の日本の医学教育改革を概括し、米国との比較から将来展望が示された。

4人目は、東京女子医科大学名誉教授の神津忠彦先生である。今までから当センターの様々な活動に参加いただいております。センター名誉客員研究員として今回の講演をいただいた。タイトルは、「教育改革のサステナビリティ：絶えざる向上を支える仕組み」であった。教育の持続発展性を維持するには、教育の運営管理、成果の評価、研究、審議策定といった構成に対し、組織内に独立した部門を設置すべきというドラスティックな内容であった。

5人目は、東京医療センター・臨床研究センター・東京大学医学教育国際協力研究センター名誉センター長である加我君孝先生である。「海外留学のインパクト—精神科医で歌人の齋藤茂吉、39歳からのオーストリア・ドイツ研究留学(1921～1924)」と題し、1920年代のドイツ医学の連綿たる歴史、指導者の姿勢などについて述べられた。



▲ 式典・シンポジウム会場

懇親会

講師 錦織 宏

10周年記念式典・シンポジウムでは、最後に、教育研究棟13階のイタリアレストラン「カポ・ペリカーノ」で懇親会を行った。会では、センターで以前に勤務され現在多方面でご活躍中の、水嶋春朔先生（現横浜市立大学医学部社会予防医学教室教授）や大滝純司先生（現東京医科大学医学教育学講座教授）、松村真司先生（現松村医院院長）に、センター勤務時のお話などを頂けた。また、元東大医学部教務委員長の高本眞一先生（現

三井記念病院院長）と日本医学教育学会会長の伴信太郎先生（名古屋大学医学部附属病院総合診療科教授）にもお言葉を頂いた。そして鉄門室内楽に素晴らしい演奏もいただき、無事に会を終えることが出来た。参加いただいた多くの先生方をはじめ、関係者の皆様がこの場を借りて御礼申し上げたい。ありがとうございました。



▲ 懇親会の最後の集合写真



▲ センターゆかりの先生方



▲ 鉄門室内楽の演奏

東京大学医学教育国際協力研究センター 10周年記念式典・シンポジウム

1. 開催日時：平成22年5月29日（土） 13時30分～17時40分（18時より 祝賀会）
2. 会場：東京大学（本郷）医学部総合中央館3階 333会議室
3. 主催：東京大学医学教育国際協力研究センター

式典	
13:30～13:40	開会挨拶 東京大学医学教育国際協力研究センター 教授 北村 聖
13:40～13:50	来賓祝辞（3名） 日本医学会 会長 高久 史磨 氏 文部科学省 大臣官房国際課長 芝田 政之 氏 東京大学大学院医学系研究科 副研究科長 飯野 正光 氏
13:50～13:55	記念撮影
13:55～14:00	ビデオ・メッセージ カナダ・マギル大学医学部教授 リンダ・スネル
14:00～14:20	部門報告1 医学教育国際協力研究部門・外国人客員教授部門 東京大学医学教育国際協力研究センター講師 錦織 宏
14:20～14:35	部門報告2 医学教育国際協力事業企画調整・情報部門 東京大学医学教育国際協力研究センター講師 大西 弘高
シンポジウム	
14:45～15:15	講演1 "Professionalism 2010: Practical Steps to Change the Environment" 米国・ニューメキシコ大学医学部 副医学部長・教授 エレン・コスグローブ
15:15～15:45	講演2 "Assessment of Attitudes in Medical Students" マレーシア・国際医学大学准教授 ヌジ・ハル・モハド・イブラム
15:45～16:15	講演3 "An American Educator's Impression of Japanese Medical Education: Looking Back and Looking Ahead" 米国・オレゴン健康科学大学医学部教授 ゴードン・ノエル
16:20～16:30	休憩
16:30～17:00	講演4 「教育改革のサステナビリティー ― 絶えざる向上を支える仕組み」 東京女子医科大学名誉教授 神津 忠彦
17:00～17:30	講演5 「海外留学のインパクト―精神科医で歌人の齋藤茂吉、39歳からのオーストリア・ドイツ研究留学（1921～1924）」 東京大学名誉教授 東京医療センター・臨床研究センター名誉センター長 東京大学医学教育国際協力研究センター 名誉センター長 加我 君孝
17:30～17:40	閉会挨拶 東京大学医学教育国際協力研究センター長 山本 一彦
祝賀会	
18:00～20:00	会場 ：教育研究棟13階 イタリアンレストラン「カポペリカーノ」

JICAラオス国セタティラート大学病院 医学教育研究機能強化プロジェクト

講師 大西 弘高

このプロジェクトは、2007年12月から4年間の予定で開始されたが、今年11月で終了するため、徐々に終了後を見据えた対応が必要な時期となった。

2010年6～7月に、終了時評価が行われた。ここまで、保健科学大学の学生数増加が教育の質の維持を難しくしており外部条件が満たされなくなったこと、セタティラート病院臨床研修センターの火災によって利用が一時ストップし追加の機材供与が必要になったこと、2009年12月にラオスで開催された東南アジアスポーツ大会によって予定通りに臨床実習が行えなかったことなどの困難を乗り越え、臨機応変に対応してきた点を評価していただいた。また、学生数急増に対して、臨床教育を市内教育病院だけでなく、地方の県病院にも展開する流れになったため、県病院での指導医研修を実施し、ラオス全土にプロジェクトのインパクトが発現しそうな流れになっている点が高く評価された。この結果については、第6回 Joint Coordinating Committee (JCC) の会合で、ラオス側は Dr. Ponmek Dalaloy 保健大臣、Dr. Khampe Phongsavath セタティラート病院長、Dr. SomOck Kingsada 保健科学大学長ら、日本側は終了時評価団長であった JICA 人間開発部技術審議役牛尾光宏先生、JICA ラオス事務所副所長米山芳春氏、当プロジェクト総括の大西らが同席し、調印式を行った。

今年度の主な活動は、ここまでに構築した臨床教育モデルの普及及びモニタリングである。臨床教育モデルとして Medical Teaching Unit (MTU) という医学生・研修医・指導医を一体化したチームアプローチを考案し、診察や診療録記載、救急当直を含めた業務管理手法を採り入れた。保健大臣がこの方法論を強くサポートしているため、今までから実施してきた市内4教育病院でも、一層厳格な運用が行われているし、地方にある4県病院においても2010年1月から開始された臨床実習が比較的スムーズに開始されている。

このような流れを可能にしたのは、ラオス側でセタティラート病院以外からも参加者を募った Project for Medical Education in Laos (PMEL) のメンバーである。2010年6～9月の4ヶ月間に、計14回の指導医研修ワークショップを開催してきた。そのうち、4回は日本側の医学教育専門家無しで開催されており、プロジェクト終了後も自立発展的にワークショップを開催していける見込みが出てきた。マリアテレサ病院、ルアンパバン県病院における指導医研修ワークショップの際は、PMELメンバーと共に病院に行き、学生実習の現場でPMELメンバーが指導している様子を見せたり、各県病院の指導医の指導に対してPMELメンバーがフィードバックしたりした。PMELメンバーの何人かは、現場での指導に非常に長けており、学生が症例プレゼンテーションした後の的確な質問などの様子を見てみると、他の指導医のロールモデルとしてふさわしいと感じられた。

ルアンパバン県病院でのワークショップの際には、実際の指導場面を見る機会があった。この県病院は、指導医の数が少なく、医師補 (medical assistant) が現場での診療を提供することが多いことから、MTUシステムにも医師補を組み込むべ

きであるという提言はなされていた。医師とは違い、襟のない白衣を着ているなど、医師補は現場でも区別されている様子が見受けられたが、症例プレゼンテーションの後にフィードバックする姿は指導医と同様であり、堂々としていた。9月にワークショップの効果を確認するためのインタビュー調査を行ったとき、産婦人科で働くこの女性医師補からも話を聴くことができた。当初は、学生が自分たちを指導者として見てくれないので、どう対応すべきか悩んだそうだが、一緒に仕事をしてみると、業務経験がある医師補から学ぶことが多々あると学生は気づき、きちんと指導を受けるようになったそうである。この医師補も指導医研修ワークショップを受けており、役に立ったと感想を述べてくれていた。

指導医研修ワークショップにより、教育病院で働く指導医らは、我々の展開してきた MTU モデルなど、医学教育に関して一定の知識や技法を得ることができた。しかし、保健省の官僚や保健科学大学の上層部の人たちは、ワークショップに張り付いて参加することがないため、医学教育セミナー、医学教育シンポジウムを通じて、普及を図ることにした。6月21日に開催された第4回医学教育セミナーでは、私が研修管理委員会とPMELのシステムについて講演した。これによって、各教育病院とUHSが研修管理においてそれぞれどのような役割を担うべきなのかについての問題が明確化された。この内容については、9月15日に開催された第3回医学教育シンポジウムにおいて、改めて議論された。研修管理委員会を各病院に設置する方向については、多くの賛同が得られたが、現状で異なったシステムが機能しており、これらの調整が必要であるという意見が出された。



▲ 第6回 JCC の模様



▲ ルアンパバン県病院で指導する医師補からフィードバックを受ける学生

JICAアフガニスタン医学教育プロジェクト フォローアップ協力

講師 大西 弘高

今回の現地派遣は、2005年7月～2008年6月まで行われた「JICA アフガニスタン国医学教育プロジェクト」の成果を補強する意味で行われるフォローアップ協力の枠組みで行われた。フォローアップ協力の第1回は2009年4月に実施され、追って2009年11月に第2回が予定されていたが、国内治安情勢の悪化によって延期され、今回2010年5月に実施される運びとなった。なお、今回当センター客員研究員である足立拓也先生にも同行いただくことになった。足立先生は2007～2008年にかけて1年以上現地に長期専門家として派遣されていた、いわばアフガニスタンの医学教育のスペシャリストである。日程は、私が2010年5月7～15日、足立専門家が5月7～27日となった。

フォローアップ協力の最も大きな目標は、これまでに構築された医学教育モデルの全国への普及である。今まで、アフガニスタン国内の医学部は、カブール医科大学と6つの県の大学医学部の計7カ所だったが、新たに5つの私立大学医学部が開設され、計12カ所に及んでいる。当センターでは年2回の国別研修もアフガニスタンから請け負っているが、私立大学医学部からは教員を招いたことがなく、今後対象を広げる必要が生じるかもしれない。

2010年5月10～11日の2日間、全国医学教育ワークショップを開催し、6つの県の大学医学部からも教員を招いて議論を行った。国別研修で日本に来た教員が多く出席しており、再会を互いに喜

び合った。テーマは、①教育の質管理、②PBL、③講義技法、④臨床教育の改善および学習者評価の4つであった。②～④はおなじみの内容だが、①は新たに私立医学部が急増したため、高等教育省、カブール医科大学が共に喫緊の課題としていることが窺われた。

その後、カブール医科大学の裏に改修されたばかりの新 Ali Abad 病院を見学しに行った。脳外科の回診を見学していると、CTだけでなくMRIのフィルムも供覧されており、この5年間で医療技術の革新が急激に進んでいることが理解できた。行われていた教育技法は、以前指導した形が踏襲されており、症例プレゼンテーションを聴いた指導医が、質問を研修医に投げかけていた。また、病院の3階には南側から光の差し込む展望のよいスペースがあったが、そこには机や椅子が並べられ、臨床実習終了時の筆記試験が行われていた。教育したら評価をするという原則についても、根付きつつあると感じる光景であった。



▲ 新 Ali Abad 病院脳外科病棟の回診

インドネシア国立イスラム大学医学教育研修

特任研究員 片山 亜弥

2010年8月9日から8月20日まで、インドネシア国立イスラム大学の保健・医学部教員20名に対して医学教育研修を実施した。この研修は、2005年から独立行政法人国際協力機構（JICA）の融資を受けて実施されている国立イスラム大学保健・医学部事業（円借款事業）の一環として行われたもので、地域医療に携わる医師の能力を強化するために、医学教育の理論と方法、特に地域基盤型医学教育に関する知識や知見を習得することを目的として行われた。

インドネシアでは、医師数が22人/10万人（2004年）と極めて不足しており、特に地方部での医師不足が深刻であることから、地域医療に従事する医師の育成が急務となっている。国立イスラム大学は、地方・地域貢献を重要視している宗教省立の大学で、地方部からの学生を全学生の半数近く受け入れており、保健・医学部卒業生の地方部での医療従事を積極的に推進する意向である。こうした背景のもと、これまで事業の様々な支援を行ってきた当センターが、医学教育研修を引き受けることとなった。

今回の研修では、学習理論、学生の評価法・教授法、カリキュラム開発、医療コミュニケーション、フィードバック技法、身体診察の教育法などについて座学の講義を中心に行われた。また、地域医療に携わる医師の育成に関して日本での取り組みを学んでもらうため、1泊2日で自治医科大学や周辺医療機関への視察旅行を行った。自治医科大学については、卒業後の指定病院での勤務による学費免除のシステムや独特のカリキュラムについて関心が

高く、日光市民病院、那須南病院、七合診療所については、地域の医療機関としてのマネジメントのあり方について興味を持ったようであった。

今回は、異例の猛暑が続くなか、イスラム教徒の研修生にとってはラマダンと重なり断食期間であったにもかかわらず、健康で充実した研修生活を送ったようであった。また、2週間という短い研修期間だったが、活発に議論を行い学びの多い研修であったと思う。

センターにとっては、円借款事業の研修を行うのは初めてであり、契約などの事前準備にかなり時間を要したが、アジア科学教育経済発展機構（アジアシード）の皆様のご協力のお蔭で、無事に研修を終了することができ、改めて感謝の意を表したい。また、お忙しいところ視察を快く受け入れて下さった自治医科大学の三瀬順一先生、日光市民病院の小林宏之先生、那須南病院の関口忠司病院長、七合診療所の本間真二郎先生、そのほか関係各者の皆様にも謝意を表したい。



▲ 自治医科大学前にて

日本医学教育学会牛場賞を受賞して

東京大学名誉教授

東京大学医学教育国際協力研究センター名誉センター長
東京医療センター・臨床研究（感覚器）センター

加我 君孝

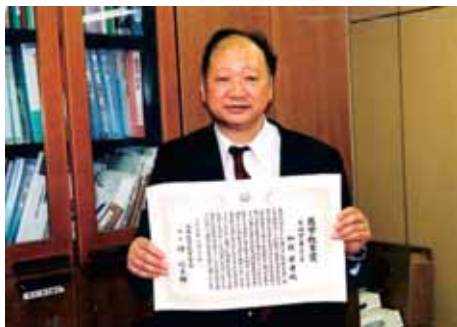
この5月に日本医学教育学会会長の伴信太郎先生（名古屋大学医学部総合診療科教授）より、私が本年度の日本医学教育学会牛場賞の受賞者に選ばれたとのお電話があった。医学教育学会創設期の初めの10年はよく発表活動をしてきたが、最近では2005年に第37回日本医学教育学会をIRCMEが担当し会長を務めたこと以外貢献していないので授賞理由を知りたいと思っていた。恐らく選考委員会の委員の中に、かつてあるいは今のIRCMEのメンバーがおられ、推薦してくれたこと以外考えられなかった。7月30日の授賞式で伴会長から表彰状を受け取って初めて授賞理由を知ることができた。

医学教育学会賞 牛場賞第二十一号 加我 君孝殿

あなたは一九七〇年発刊の医学教育第一巻一号の学生のページに投稿されるなど学生時代から東京大学医学部耳鼻咽喉科講座教授ご就任後まで一貫して医学教育に関心を持ち続けられその改善活動を続けてこられました。さらに東京大学医学教育国際協力研究センター長として海外の医学教育の紹介のみならず海外での医学教育支援を指揮されて医学教育面での国際的貢献も大なるものがあります。さらに二〇〇五年には第三十七回日本医学教育学会大会を大会長として成功裏に運営されました。日本医学教育学会はここにその医学教育分野での幅広いご功績を称え牛場賞を贈呈いたします。

二〇一〇年七月三〇日

日本医学教育学会
会長 伴 信太郎



▲ 賞状と筆者

日本医学教育学会誌の発行初年度（1970年）は、当時まだ東大医学部のM3の学生であったが、学生カリキュラム委員長として2つの主張あるいは批判のようなものを書いている。1つは「医学科学部教育改革への現況と方向—東大医学部の場合」で、もう1つは「臨床実習とその周辺—大学病院は飽和状態だ—」というタイトルである。この時代から東大のIRCMEまでの約35年間の私の医学教育に対する活動全体が受賞の対象であることを知り嬉しく感じた。受章のために久しぶりに出席した日本都市センターで開催された第42回医学教育学会学術講演会で最も印象深かったことは、教育機器展示のブースがたくさんあったことと、書籍展示の医学教育関連の出版物の多さであった。医学教育関連産業も活発になりつつあることがわかった。

私はこれまで賞というのをいただいたことは少ない。耳鼻咽喉科領域では特に「耳科学」を専門としているが、この学会の20年の歴史の中で私の指導した論文が3回奨励賞を受賞したことを除くと、3年前から現在仕事をさせてもらっている国立病院機構東京医療センターの「禁煙ポスターコンクール」で画家のゴッホの2つの画を並べた作品が最優秀賞を受賞したことだけだったので、今回の医学教育学会牛場賞は格別嬉しいことであった。3年前にスウェーデンのカロリンスカ研究所が運営している世界医学教育学会賞にノミネートされていることを知ったが何の音沙汰もないので選に洩れたのであろう。

“牛場賞”とは日本医学教育学会の創始者で長く会長を務めた慶應大学微生物学教室の牛場大蔵教授を記念したものである。牛場先生は英国風の紳士を思わせる方であった。IRCME以前の私の医学教育のカリキュラムの中では、特別に薫陶を受けたのは鈴木淳一帝京大耳鼻咽喉科教授、J.Gonnella ジェファーソン医科大学学長、そして牛場大蔵教授の3人の医学教育者であった。現在東京医療センターでは2週間に1度、耳鼻咽喉科の臨床実習に來ている慶應大学医学部学生を指導している。この教育指導は私にとって楽しい医学教育の継続となっている。慶應の学生はフレンドリーである。会ったその瞬間から私が耳の病気とそれに関連する医学の世界史を合わせ20ぐらいの質問を浴びせながら約90分を費やす。学生は少し考えて正しい答えも間違った答えもするが、とにかく率直に考えて返事をするので打てば響くような双方向性の教育となっており、学生にとっても楽しいらしく、私は牛場大蔵教授に恩返しをしているような気持ちになる。今回の賞状は、同じく懸田賞を受賞した錦織宏先生の賞状と一緒にIRCMEに掲げておくこととしたい。



▲ 東京医療センター禁煙ポスターコンクール最優秀賞を受賞した筆者のポスターデザイン

日本医学教育学会参加報告

講師 大西 弘高

2010年の大会は日本医科大学の主幹により、都市センターホテルで7月30、31日に開催された。毎年、医学教育関係者にとって、この時期は「熱い夏」であるが、私にとっての今回のトピックスをいくつか挙げたい。

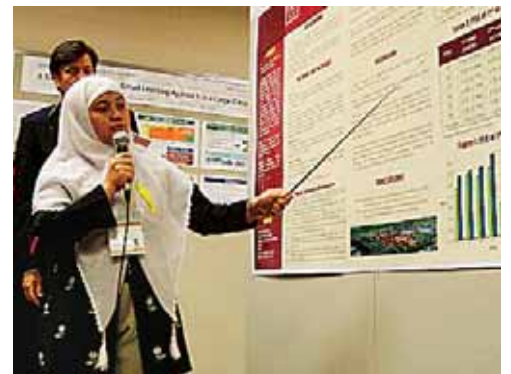
まず、インターナショナルセッションについてである。年々外国人の発表が増えていて、これを運営している国際関係委員会の一員として嬉しく感じている。今回は、写真に載っている佐賀大学医学系研究科に所属する Marita Fadhilah さん、Risahmawati Tholib さんの二人が、併せて研究成果を発表した。彼女たちは、いずれもイスラム大学の医学部教員であり、以前私がインドネシア現地で行った面接で選出した留学生29名のうちの2名である。惜しくも受賞には至らなかったが、内容やプレゼンテーションのスタイルはしっかりしていて、PhD 候補となるに十分と感じた。

次いで、プログラム評価に関するシンポジウムについてである。教育領域のプログラム評価の第一人者である東工大副学長の 牟田博光先生を司会に迎え、私が「医学教育におけるプログラム評価—新医師臨床研修制度の評価を例に」について導入の説明を行った。また、「プログラム評価の基本的枠組」について(財)国際開発センターの佐々木亮先生、「準実験デザインによるプログラム評価の方法と応用」について西武文理大学サービス経営学部の安田節之先生に論じていただいた。150人ぐらいの会場

であったが、立ち見が出るなど関心の深さを窺わせた。また、プロジェクト・サイクル・マネジメントなど、プログラムの運営・管理の手法とプログラム評価のつながり、研究と評価の違いなどについて、理解が深まったのではないと思われる。

最後に、私が京都科学と共同研究してきた心音シミュレーターイッチローの学習用ソフトウェアに関する口演をしたことについてである。今回は、京都科学の20代職員に対して、1音、2音のタイミングで、コンピューターのマウスを左クリック、右クリックさせ、そのタイミングが合っているかどうかフィードバックさせるソフトウェアを用いて実験を試みた。最初は大きく

ずれているクリックのタイミングが、全員が徐々に合っていく様子を示した。聴覚刺激の認知心理学的な処理プロセスなど、興味深い議論が行われた。



▲ インターナショナルセッションの一コマ：佐賀大学大学院のマリタさん

日本医学教育学会報告～医学教育懸田賞受賞～

講師 錦織 宏

日本医科大学の主催で行われた第42回日本医学教育学会は、近年の医学教育に対する関心の高まりを反映し、演題数は過去最大のものとなったが、ここでは私自身の行った発表などに関して報告する。

インターナショナルセッションには、初回からほぼ毎回、発表を続けているが、今年は東大の医学教育改革ワーキンググループの活動ともリンクして行っている、研究医育成に関する内容を発表した。Faculty Developmentで教員を対象にとったデータをもとに、「医学部でどのように研究者を育てるか？」というクエスチョンに対する答を、質的な分析によって、一定、明らかにした。本研究は今後も続けていく予定であり、ご興味のある方は、ご連絡をいただきたい。なおこの発表は、学会の国際関係委員会の複数の審査員による評価によって、本年のインターナショナルセッション優秀賞に選定された。

また、東京大学と東京医科歯科大学が合同で運営している模擬患者養成組織「つつじの会」に関する内容についても、一般口演で発表した。つつじの会では模擬患者の能力をある程度標準化することを目的として、2年連続で同組織の外部評価を実施したが、その内容について全国の多くの模擬患者養成者と共有できた。また同セッションでは座長を務めさせていただいたが、同じ時間帯に日野原重明先生の特別講演があったにもかかわらず

ならず会場が参加者であふれる状況になり、あらためて模擬患者に関する関心の高さを認識することとなった。

また本年の総会では、2000年の当センター設立当初から2007年3月までセンター長を務められた加我君孝先生が牛場賞を受賞されたことは当センターにとってもこの上ない喜びであった。加えて、自身が2009年の医学教育学会誌に掲載した原著論文「臨床研修の充実化による地域の医師確保モデルの提唱」までもが評価され、若手研究者対象の医学教育賞(懸田賞)を受賞することとなり、センターにとって今年は大変賑やかな学会となった。センターOBでは大滝純司先生や松村真司先生が受賞している懸田賞を頂けたことは非常に光栄なことであると感している。本研究の実施にあたってお世話になった多くの方々はこの場を借りて御礼申し上げる。また本賞は「これからの日本の医学教育の発展に貢献するように」というメッセージが込められていると理解している。今後も研鑽を積み、センターでの活動を基盤に、医学教育の発展のために尽くしていきたい。



▲ 医学教育振興財団理事長の高久先生から懸田賞を頂く

模擬患者つつじの会

特任研究員 三木 祐子

模擬患者つつじの会が発足してから早2年半が経過したが、最近、当会には大きな出来事があった。今夏、本学の医学部教務委員会において、同委員会の下部組織に模擬患者養成特別委員会を設置することが正式に決まった。また予算委員会の審議を経て、模擬患者に協力頂く授業やOSCEに関する謝金・交通費の他に、養成に関わる費用に関しても医学部の運営費から捻出頂けることになった。これらはひとえに医学教育に携わる先生方にご理解頂いた賜物であると思う。関係者の皆様にこの場を借りて深謝したい。

さて、今年度は従来の養成コースを勉強会と改称し、奇数月に講義・演習形式による定期勉強会、偶数月に模擬患者の自主勉強会をスタートさせた。これらは昨年度末に受けた外部評価の内容を参考にした変更である。定期勉強会はこれまでの養成コースと進め方は同様であるが、新たに始めた自主勉強会では、模擬患者の方達により自主的に活動を展開して頂いている。また近々、他組織の模擬患者との交流も計画している。授業に用いるシナリオも少しフォーマットを変更し、より自由度の高い形式とした。当会もいよいよこれから発展期に入るが、今後も

引き続き報告していきたい。



▲ 第3期生の修了式

医療面接実習（臨床診断学実習）

教務補佐員 澤山 芳枝 講師 錦織 宏

当センターでは、10年前から東大医学部医学科のM2学生を対象とした「模擬患者による医療面接実習」の教材開発、実習のサポートを行っている。今回は、現在の実習の様子を報告する。

実習は、学生100名を16班に分けたグループ学習の形で行われ、毎回、2班ずつ実習を実施する。実習のファシリテーターは、各班の担任の先生（臨床系の講師の先生方）が担当していただき、コーディネーターとして各班1名ずつ当センターのスタッフが務めている。担任の先生は毎年交代するため、臨床診断学実習開始前に老年病科の江頭正人講師（臨床診断学実習担当）と当センターが毎年春に実施するFD（Faculty Development）に参加して、医療面接実習の進め方について説明を受けている。模擬患者さんは当大学と東京医科歯科大学のコンソーシアムで養成している「模擬患者つつじの会」のSP（Simulated Patient；模擬患者）さんたちが毎回4名参加してくれている。SPさんたちはこの授業に模擬患者として参加できるよう、普段の定期勉強会でトレーニングを積んでいる。

現在の医療面接の授業では、1人の学生が模擬患者さんと8分間の医療面接のロールプレイを行う形で行っている。同じ班の他の学生はその様子を見学し、良かった点や改善点をロールプレイ後にグループでディスカッションするPeer Reviewの形式をとっている。ビデオ撮影も行っており、その内容はグループディスカッションの際に必要な応じて見ながら実習が進められる。またDVDの形にして学生一人一人に配布され、「人生

で初めての医療面接」の記念として、今後の学習に役立ててもらおうようにしている。

医療面接実習は、毎年、学生アンケートで「もう1回やりたい」との声が多い実習であったため、本年度から2回実施することになった。現在のところ、共用試験OSCEへの対応という意味もあり、初診の設定での医療面接を扱うことが多いが、難しい患者さんへの対応や告知の場面での医療面接など、今後、色々と発展させていきたいと考えている。



▲ 医療面接実習の様子

東京大学医学教育セミナー

講師 錦織 宏 事務補佐員 三浦和歌子

前回の報告に続き、第20回から第25回までの東京大学医学教育セミナー実施状況をまとめた。タイ国コンケン病院のカノクワン先生の講演では、国家試験 OSCE の導入を始め、同国の教育に関するいくつかの先進的な試みについて紹介があった。東南アジアでの医学教育改革はめざましいものがあり、今後も注目する必要があるであろう。錦織の講演では、医学教育の理論と実践の橋渡しをテーマに、実践者が医学教育学とどのようにつきあえばよいかについて論を展開した。特に実践現場での教育活動に関する振り返りの重要性が強調された。北村の講演では、臨床研修制度が改定されて6年を経た東大病院の卒後臨床研修の現状が報告された。ポスト医局講座制時代の若手医師のキャリアを考える必要性を改めて感じた。

10周年記念行事に合わせて開催されたローテム先生・大西の協同セミナーでは、発展途上国における医学教育改善の課題が討論形式で検討された。短期的には結果の出にくい「医学教育」と「国際協力」分野の問題点などを共有できた。また熊本大学の鈴木克明先生には、インストラクショナルデザインの分野の最先端の研究を紹介頂いた。このセッションは、錦織が東大で

行っている授業のプレゼンテーションを題材にした討議形式のみで行うという非常に面白いスタイルで行われた。そして現在、西太平洋地区医学教育連盟の会長を務められる東京女子医科大学の吉岡俊正先生には、世界各国で整備の進む医学教育の国際質保証について紹介頂いた。グローバル化の進捗中、医学教育分野でどのように日本が世界と対峙していくかについて再度考えさせられた。

本医学教育セミナーでは今後も、医学教育学の発展に資する最先端の内容を取り上げていく予定である。是非ご期待いただきたい。なお本セミナーの内容は講師の了承のもとビデオに収録しVOD(Video on Demand)の形で配信している。当センターのホームページ (<http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp>) からアクセスできる。ご都合がつかずに参加いただけなかった場合はそこからご視聴が可能である。



▲ 第20回医学教育セミナー演者のカノクワン・スリルクサ先生

回	開催日	演題	講師
第20回	2010.2.12	タイ国の医学教育～西洋医学との遭遇の歴史、医師不足問題を抱える現在、そして未来への課題	カノクワン・スリルクサ タイ国 コンケン病院小児科医師 東京大学医学教育国際協力研究センター特任講師
第21回	2010.3.19	医学教育と医学教育学～Reflective Medical Teacherモデル～	錦織 宏 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師
第22回	2010.4.21	東京大学の卒後研修の現状について	北村 聖 東京大学医学教育国際協力研究センター 教授
第23回	2010.5.29	東南アジアの発展途上国における医学教育改善の試み	アリー・ローテム オーストラリアニューサウスウェールズ大学名誉教授 大西弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師
第24回	2010.6.18	インストラクショナルデザインの諸モデルは医学教育の改善に役立つのか	鈴木 克明 熊本大学大学院 教授システム学専攻長・教授
第25回	2010.7.13	医学教育の国際的質保証	吉岡 俊正 東京女子医科大学副理事長・同医学部医学教育学教授

共用試験OSCE

2010年度の本学共用試験 OSCE は1月30日(土)に実施した。医学部医学科のM2学生103名が昨年同様、午前・午後に分かれて、6つのステーション(医療面接・頭頸部・胸部・腹部・神経・救急)の実技試験を受験した。当日は評価者が計72名、模擬患者が計27名(M1学生も含む)、医学部事務が計24名、センターより計4名の方々にお世話になった。こ

教務補佐員 澤山芳枝 講師 錦織 宏

の場を借りて御礼申し上げる。なお今年度より医療面接ステーションにおいて、「模擬患者つつじの会」のメンバーの方たちに模擬患者としてご協力頂いた。近年の医学部定員増により、本学の共用試験 OSCE もスケジュールを見直す必要が出てきている。評価者の負担を減らすことも含めて、今後も色々な課題を解決していきたい。

医学教育改革WGによる公開討論会

講師 錦織 宏

2009年7月より定期的な会合を続けている本学の医学教育改革WG（ワーキンググループ）の活動の一環として、2010年7月9日に同WGで1年間にわたって行ってきた議論や今後の方向性について、医学部と医学教育国際協力研究センターが共催する形で、公開討論会を行った。プログラム内容は右の通りであり、研究者育成プログラムの内容、基礎系カリキュラム改革案、学生組織の構築の現状、社会医学の卒前教育の展望、臨床実習の今後の方向性などについて、WGの委員から報告し、その後、学生も交えた公開討論がパネルディスカッションの形で行われた。

この公開討論会は、WGのメンバーが毎月集まって議論してきた内容を、他の医学部教員および学生に報告することで説明責任を果たし、またさらに議論を重ねることに目的があった。ただ当初予想していたよりも参加人数が少なく、WGのメンバーに加えて、教育に強い関心を持つ一部の教員が集まった形での実施となった。教員の教育に対する関心の低さが改めて露呈した形にはなったが、今後もこのような機会を継続して提供し、出来るだけ活動を広く展開していければと考えている。



▲ 公開討論会でのパネルディスカッション

第1回 東京大学の医学教育改革に関する公開討論会

日時：2010年7月9日（金） 18:00～20:00

場所：東京大学医学部総合中央館3階 333室

プログラム

開会挨拶と医学教育改革WGの発足経緯

代謝生理化学 栗原裕基教授

2009年度医学教育改革WG活動報告

医学教育国際協力研究センター 錦織宏講師

基礎系カリキュラム改革現状報告

代謝生理化学 栗原裕基教授

MD研究者育成プログラム現状報告

MD研究者育成プログラム室・分子病理学 狩野光伸講師

臨床研究者育成プログラム現状報告

血液・腫瘍病態学 黒川峰夫教授

臨床実習の今後の方向性

消化管外科学 瀬戸泰之教授

社会医学の卒前教育について

国際地域保健学 神馬 征峰教授

学生組織の構築について&次回のFDの案内

医学教育国際協力研究センター 錦織宏講師

公開討論会（パネルディスカッション形式）

オタワ会議参加報告

講師 大西 弘高

オタワ会議は、隔年で北米、その他の地域で交互に開催される医学教育の国際学会である。元々、Dundee大学のRonald Harden教授と、Ottawa大学のIan Hart教授が1985年に開催し、1986年から隔年に開催されて、今回が第14回となった。場所は米国マイアミで、5月の非常に暑い中での大会となった。

当初、オタワ会議は医療者教育領域の評価に関して議論する学会であったが、近年医学教育全般に関して広く議論することが増え、同じHarden教授が関わっておられるヨーロッパ医学教育学会（AMEE）との異同が問題となってきた。AMEEが欧州地域の学会に留まらず、国際的に非常に評判のよい学会へと成長したことにより、オタワ会議との線引きが重要になってきたと言える。

今回は、このような事情を踏まえ、医療者教育領域の評価に関してテーマ別に高いレベルの議論を行い、ポジションペーパーのようなものを出してみたらどうかということになった。テーマは事前に、(1) Criteria for Good Assessment, (2) Technology and Assessment, (3) Performance Assessment, (4) Assessment of Professionalism, (5) Assessment for Selection and (6) Assessment Researchの6つが選択された。私はその中で、Assessment Researchの委員の一人として学会中何回にも及び会議に出席し、ペーパーをまとめる作業に参画した。

会議の中で、何度となく言及されていたのは、OSCEの歴史的な意義についてであった。ステーション数を増やすことにより、

全体的な信頼性を向上させることができる。このことを、一般化可能性理論を用いて証明することもできる。そして、そのような方法論を入学試験の面接に応用したものが、Kevin Evaが考案したMultiple Mini-Interview (MMI)として結実した。これらの考察から、評価研究に関して、いくつかの推奨される原則を挙げ、今後の評価研究がその原則を守ることで、より議論しやすい状況を生もうということになった。例えば、「評価研究における実際の事例報告は重要」、「ある評価が既存の評価よりよいかどうかを議論するためには、注意深い理論的背景の下で実施されるいくつかの研究が必要」、「評価の妥当性は完全に証明することが不可能である」「信頼性はCronbach α で示すのではなく、一般化可能性係数によって示すべき」といったややドラスティックな内容となった。私は、Dr. Stewart Mennin, Dr. Cees van der Vleuten, Dr. Louis Pangaro, Dr. David Swanson, Dr. Larry Gruppen, Dr. Jerry Colliverなど、論文で名前を知った大御所たちが互いに議論を交わすのを眺めていることが多かったが、大変刺激的な会議であった。



▲ 会頭講演の様子

APMEC参加報告

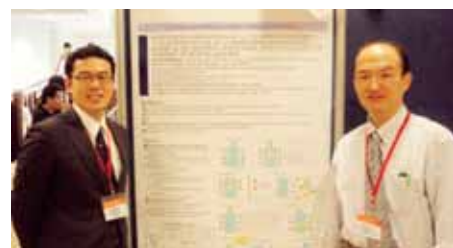
講師 錦織 宏

2010年2月4～8日にシンガポールで開催された第7回アジア太平洋医学教育学会に参加した。本会は欧州医学教育学会(AMEE)の東南アジア支部的な位置づけがあり、毎年欧米各国から多くのゲストスピーカーが招かれて行われている。私自身は前回2004年12月の第2回大会に参加して以来、5年ぶりの参加であったが、口演発表も増えてプログラムの内容も非常に充実しており、正直その発展に驚いた。

本会では、本センターの元助教でおられた大滝純司先生(現東京医科大学医学教育学講座教授)と共同研究の形で進めている、HDPE(Hypothesis-driven physical examination)のモデル授業の評価研究について発表した。あらかじめ送っていた抄録が評価されてベストポスター賞にノミネートされ、そのカテゴリーでの発表となった。審査員の評価を受けながら、わかりやすく堂々と発表はできたものの、残念ながらベストポスター賞の受賞は逃した。結果発表のあと、滞在しているホテルに戻って非常に悔しい思いを抱えたことは今でも記憶に新しく、次回こそはという思いで今は研究活動を続けている。なお本発表の内容は下記のMedical Education誌の別冊に掲載されている。

Nishigori H, Masuda K, Kikukawa M, Kawashima A, Okubo T, Yudkowsky R, Bordage G, and Otaki J. Hypothesis-Driven Physical Examination (HDPE)-to Teach Physical Examination Along with Clinical Reasoning: Structure and Evaluation of a Model Teaching Session. Med Educ. 2010;44(Suppl 4):9.

一方で、本ポスターが人目につきやすい場所で展示されたこともあり、多くの聴衆に立ち寄ってもらって、アジア各国の研究者に自分たちの研究内容について紹介することが出来た。そしてそのこともあってか、2011年に開催予定の第8回アジア太平洋医学教育学会で本内容に関するワークショップを実施することとなった。少しずつではあるが本研究を発展させていきたいと考えている。



▲ ポスター発表会場にて大滝先生と共に

西太平洋地区医学教育会議

講師 大西弘高

2010年8月1～2日に、西太平洋地区医学教育会議(Association for Medical Education in the Western Pacific Region: AMEWPR)の会議が東京で行われた。AMEWPRは世界医学教育連盟(World Federation for Medical Education: WFME)の下にある6つの地区支部の1つである。WFMEはWHOとつながりが深いことから、WHOのWestern Pacific Regional Officeに管轄されている中で、医学部があるオーストラリア、ニュージーランド、ベトナム、中国、韓国、カンボジア、モンゴル、フィリピン、パプアニューギニア、ラオス、マレーシア、シンガポール、日本の13カ国がAMEWPRに参加している。会長が東京女子医大医学教育学教授の吉岡俊正先生、事務総長が私という体制で2008年に引き続いて二期目の会議を実施した。なお、当センターもこの会議を共催し、2日目の8月2日の会議は医学部総合中央館310室で開催した。

主な情報として、WFMEが現在推進しているGlobal Role of Doctors、ミクロネシアの医学教育の現況、WFME Global Standardの西太平洋バージョンが議論に上った。Global Role of Doctorsは、アウトカム基盤型教育の考えに沿って世界的な医学教育の共通アウトカムを目指そうというもので、コペンハーゲンで2010年3月19-20日に開催された会議に慈恵医大の福島統先生が出席された。アジアの国々には、東洋医学や伝統医学の医学校を持つ国もあるが、そういった医学校も同列のアウトカムに沿うことが想定されているのかといった議論がなされた。

次いで、WFME Global Standardの西太平洋バージョンについてである。現在のところ、WHOの西太平洋支部における医学教育の質管理ガイドラインがAMEWPRの共有資料として用いられている。これは、WFME Global StandardのBasic Medical Educationと似た内容を扱っているため、一本化しようということが主題であった。結局、WFME Global Standard-Basic Medical Educationの各項目にAnnotationを加えていき、そこにAMEWPRの特色を打ち出すことで、WHOのガイドラインを生かそうという案が出た。これにより、WFME Global Standards for Basic Medical Education-AMEWPR Specificationsの最終版が合意され、今回の成果となった。

次期会長、副会長の選挙については、大きな問題なく進行的な。今回副会長を務められた韓国高麗大学医学部教授のDr. Duck-Sun Ahnが次期会長に、シドニー大学医学部の副学部長であるDr. Michael J. Fieldが次期副会長に選出され、満場一致にて合意された。

今後も、AMEWPRにおいては日本医学教育学会の国際関係委員会において、現在委員長の吉岡先生のリーダーシップにより、日本からのプレゼンスを示していくことになるだろう。



▲ 全員での記念写真

● 今後の外国人客員教授招聘スケジュール

センター外国人客員教員として、次の先生をお迎えする予定です。

ゴミンダ・ポナンペルマ (Gominda Ponnampeluma, MBBS, MMed, PhD)

現所属：スリランカ コロンボ大学医学部 医学教育開発研究センター 上級講師

英国 ダンディー大学医学教育センター 非常勤講師

招聘予定期間：2011年2月～3月（2ヵ月間）

● センター日誌 | 2010年2月～2010年8月 |

2 FEB		6 JUNE	
(1月26日～)19日	JICAラオスプロジェクト現地活動（大西）	1日～23日	JICAラオスプロジェクト現地活動（大西）
12日	第20回東京大学医学教育セミナー （カノクワン・スリルクサ タイ・コンケン病院小児科 医師）	14日	「模擬患者つじの会」自主勉強会
15日	「模擬患者つじの会」養成コース 講習(IV)・健康講座	18日	第24回東京大学医学教育セミナー （鈴木克明 熊本大学大学院社会文化科学研究所 教授システム学専攻 教授）
3 MAR		19日（-7月2日）	JICAラオスプロジェクト現地活動（北村）
1日～16日	JICAラオスプロジェクト現地活動（大西）	29日（-7月9日）	JICAラオスプロジェクト現地活動（大西）
1日～12日	M0フリークォーター	7 JULY	
7日～11日	中国・新興/再興感染症研究拠点形成プログラム調査（北村）	12日	「模擬患者つじの会」養成コース 定期勉強会・健康講座
15日	「模擬患者つじの会」養成コース 講習(V)・健康講座	13日	第25回東京大学医学教育セミナー （吉岡俊正 東京女子医科大学副理事長、同医学部医学教育学教授）
17日	第21回東京大学医学教育セミナー （錦織宏 東京大学医学教育国際協力研究センター講師）	28日	平成22年度第1回運営委員会
31日	平成21年度第3回運営委員会	8 AUGUST	
4 APR		2日	「模擬患者つじの会」自主勉強会
7日	診断学実習FD	9日～20日	JICAインドネシア国立イスラム大学医学教育研修受け入れ
12日	「模擬患者つじの会」養成コース 講習(VI)・健康講座		
22日	第22回東京大学医学教育セミナー （北村聖 東京大学医学教育国際協力研究センター教授）		
5 MAY			
7日～15日	JICAアフガニスタン医学教育プロジェクトフォローアップ協力現地活動（大西）		
19日	臨床診断学実習（模擬患者による医療面接実習総論）実施		
24日	「模擬患者つじの会」養成コース 講習(VII)・健康講座		
24日（-10月4日）	臨床診断学実習（カルテの書き方）実施		
24日（-10月6日）	臨床診断学実習（模擬患者による医療面接実習）実施		
29日	東京大学医学教育国際協力研究センター設立10周年記念式典・シンポジウム・懇親会		
29日	第23回東京大学医学教育セミナー （アリー・ローテム ニューサウスウェールズ大学名誉教授・大西弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター講師）		

編集後記

秋も深まって参りました。秋といえば、スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋などがありますが、皆様はどのような秋をお過ごしでしょうか。

センターもおかげさまで今年設立10周年を迎えました。これも一重にみなさまのご指導・ご協力の賜物と深く感謝しております。今号は、そんなセンター設立10周年記念を一面に掲載し、前号よりパワーアップした全12頁で皆様にお届け致します。ご一読くださいませ。

それでは皆様、秋冷日ごとにつる季節どうぞお健やかに過ごして下さいませよう。（岩）



発行元

発行 2010年10月29日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 三鈴印刷株式会社